

JAIR Newsletter

No.156 July 2018

日本国際政治学会



<http://jair.or.jp/>

[目次]

巻頭言.....1	理事会便り..... 3
事務局からのお知らせ.....2	2018年度研究大会プログラム.....4
新・事務局からのお知らせ.....2	国際学術交流報告書.....14
2018年度研究大会実行委員会からのお知らせ 3	編集後記.....16

理事長挨拶

佐々木 卓也

石田淳前理事長の後を受け、本年6月、理事長に選任されました。身が引き締まる思いであり、責任の重さを痛感しています。学会の一層の発展のために、微力ながら全力を尽くす所存です。

本学会は1年半前に創立60周年記念研究大会を開催し、また今春、5年間の一般財団法人移行期間を無事に終え、次の50年、60年に向けてどのような年輪を重ねていくのか、新たな出発点にたっています。この機会に、学会の幾つかの課題を会員の皆様と共有したいと思います。

まず、会員数は現在2022名(今年3月末)を数え、昨年度と比べ増減はありませんが、もはや順調な増加を期待することはできません。むしろ、中高年齢層会員の割合が高いことから、まもなく減少基調に転じるでしょう。学会の将来のために新規会員の入会を進めることが必須ですが、人文社会科学系学生の大学院進学率が落ち込み、さらに教育・研究機関に常勤職を得ることがますます難しくなっている現在、若い研究者にとってより魅力ある学会づくりのために何ができるのか、真剣に考える時期にきています。この点に関連し、研究者のなかには本学会を飛び越え、海外の学会に直接入るケースが増えていることにも、留意する必要があります。

また本学会は理論、外交史、地域研究、新領域など多様、多彩な分野の研究者から構成されており、それは海外の国際政治学会とは異なる大きな特徴です。しかしこの特徴をうまく活かしているのかという古くて新しい課題があります。これは本学会のユニークな性格に付随する、ある意味では贅沢な悩みですが、今後十分に悩み、格闘しなければなりません。

最後に、発信力の問題です。IRAPは今年1月、学会創立60周年を記念し、近年の『国際政治』に発表された論文の中から5本を選抜して英訳し、特集号を刊行しました。IRAPは本学会の英文機関誌として高い国際的評価を得る一方で、残念ながら多くの会員には未だ身近な存在ではありません。IRAPは本会員の投稿を大いに歓迎する方針を打ち出し、研究大会でセミナー等を開催してきましたが、本学会がIRAPを介し適切に国際発信をすることができるのか、今期の継続的課題です。また『国際政治』は2020年春に、第200号記念特別号「オルタナティブの模索—問い直す国際政治学」を刊行します。「冷戦とその後」を特集テーマとした第100号と同様、第200号においても、時代を超えた価値をもつ諸論文を掲載し、鮮烈な学問的発信ができるように、理事会は編集特別委員会を組織し、取り組んでいます。

時代が大きな節目を迎え、国際政治が不透明さを増すなか、本学会の存在意義を内外に示す絶好の機会が到来しています。私は自由闊達で開放的な伝統を大事にしながら、学会活動のさらなる促進、充実を心がけます。会員の皆様のご協力、ご支援、そしてご鞭撻をお願い致します。



事務局からのお知らせ

1. 監査会議の実施

5月9日に監査会議を実施し、2017年度の事業報告書および決算書類について、適正であることが確認されました。

2. 新入会員の承認

5月19日開催第12回理事会で22名の新入会員が承認されました。会費の納入をもって正式に会員となりますので、入会を承認された方々は会費を納入してくださいませよう、お願いいたします。

3. 2020年度の研究大会予定

2020年度の研究大会は、つくば国際会議場で10月23日～25日の開催を予定しております（大会実行委員長は湯川拓会員）。なお、2018年度の研究大会は、予定通り、さいたま市の大宮ソニックシティで、11月2日～4日に開催します（大会実行委員長は永野隆行会員）。また、2019年度の研究大会は新潟の朱鷺メッセで10月18日～20日に開催を予定しています（大会実行委員長は武田知己会員）。

4. e-nafの会員情報相互閲覧システム

e-nafの会員情報相互閲覧システムについて、絞り込み検索はできない設定になっております。やや不便な面はありますが、一部検索機能を改めて、分野ごとの一覧表示ができる形に変更致しました。

5. 一橋事務所の開所曜日

これまで、一橋事務所の開所曜日については金曜として参りましたが、今後は原則として金曜日に開所するものの、事務局員の事情・状況に応じて、変更となる場合がございますので、会員の皆様にはご了解いただければ幸いです。

6. 公益目的支出計画の完了

6月16日に開催された定時評議員会におきまして、2017年度の事業報告書および決算書類についての議案が承認されました。これを受けて、2017年度の活動を内閣府に届け出ることによって、一般財団法人移行期の最大の懸案事項であった公益目的支出計画を完了できる見通しとなりました。改めまして、会員の皆様方には御礼申し上げます。

7. 理事会任期の終了

6月16日に開催された定時評議員会をもちまして、2016-2018年度の理事会の任期は終了いたしました。至らない点が多々あったものと存じますが、これまでのご指導、ご鞭撻に心より感謝申し上げます。

2016-2018 年期中理事長 石田 淳
2016-2018 年期中事務局主任 遠藤 貢

新・事務局よりのお知らせ

2016-018 年期中理事会は、6月16日開催の定時評議員会をもって任期が終了し、その評議員会で選任された新理事13名による新たな理事会が、2018-2020 年期中に業務を執行することになりました（定款21条第1項）。同じ評議員会において、新たな監事（任期2年）2名も以下のように選出され、理事会による業務執行の監査にあたることになりました。

監 事・遠藤誠治 大島美穂

また6月16日には、続いて最初の新理事会を開催し、理事長と副理事長、事務局主任（常任理事）を選定するとともに、各理事の職務について決議を行いました（定款21条第2項）。この決議に基づく新理事会の業務分担は以下の通りです。

理事長・佐々木卓也 副理事長・大矢根聡 事務局主任・石川卓 会計部主任・都留康子
企画・研究委員会主任・森井裕一 同副主任・楠綾子 編集委員会主任・山田敦 同副主任・磯崎典世
英文ジャーナル編集委員会主任・飯田敬輔 広報委員会主任・山田哲也 同副主任・宮城大蔵

国際交流委員会主任・潘亮 将来構想タスクフォース主任・遠藤貢

本学会は今春一般財団法人への5年間の移行期間を満了し、今期の理事会発足とともに新たなスタートを切ります。移行期間を無事に切り抜け、スムーズに新理事会の成立に至りましたこと、会員の皆様のご協力、ご支援に厚く御礼申し上げます。新理事会として、先人の研究と学会運営の巨大な蓄積を踏まえつつ、さらに透明性や公平性を高め、また会員の皆様の研究活動を活性化できるよう、努力を重ねてゆく所存です。皆様のご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

2018-2020 年 期 理 事 長 佐々木卓也
2018-2020 年 期 事 務 局 主 任 石川卓

2018 年度研究大会実行委員会からのお知らせ

2018 年度研究大会は、11 月 2 日（金）から 11 月 4 日（日）まで、大宮ソニックシティ（埼玉県さいたま市大宮区桜木町 1-7-5）で開催いたします。プログラムの発送、事前登録 web の立ち上げは、8 月下旬～9 月上旬を予定しております。学会ホームページ（<http://jair.or.jp/>）で適宜ご確認ください。託児サービスについては会場近くの施設をご紹介する形式をとる予定です。

2018 年度研究大会実行委員長 永野隆行

理事会便り

編集委員会からのお知らせ

1. 新理事会の発足に伴い、2018～2020 年 期 は主任山田敦、副主任磯崎典世の体制となりました。以下にございます編集主任、副主任へのご連絡はすべて jair-edit@jair.or.jp 宛にお願いします（メール送付の際は、☆を@に修正してください）。
2. 203 号「核と国際政治」（編集：植木（川勝）千可子会員）の特集の趣旨、募集案内を学会ウェブサイト にアップしました。申込締切は 2019 年 10 月 31 日、原稿提出締切は 2020 年 5 月 31 日です。
<http://jair.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/committee/no203recruit.pdf>
3. 今後の『国際政治』の刊行予定についてご案内いたします。特集タイトルはすべて仮題です。
 - 2018 年度
 - ・193 号「歴史の中の国際平和機構」（編集：篠原初枝会員）
 - ・194 号「体制移行と暴力—世界秩序の行方」（編集：土佐弘之会員）
 - ・195 号「関係回復・改善の論理と実証」（編集：泉川泰博会員）。
 - 2019 年度
 - ・197 号「国際政治における中国」（編集：川島真会員）
原稿申込期限は終了しました。
 - ・198 号『『ウィルソン主義』の 100 年』（編集：西崎文子会員）
申込締切：2018 年 8 月 31 日 提出締切：2019 年 2 月 28 日
<http://jair.or.jp/committee/henshu/2791.html>
 - ・200 号「オルタナティブの模索——問い直す国際政治学」（特別編集委員会：飯田敬輔／中西寛／酒井啓子／大島美穂／大矢根聡）
申込締切：2019 年 2 月 28 日 提出締切：2019 年 9 月 30 日
<http://jair.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/committee/no200recruit.pdf>
 - 2020 年度
 - ・201 号「ソ連研究の新たな地平」（編集：松井康浩会員）
申込締切：2019 年 5 月 31 日 提出締切：2019 年 12 月 31 日
 - ・202 号「1930 年代の国際秩序構想」（編集：戸澤英典会員）
申込締切：2019 年 8 月 31 日 提出締切：2020 年 2 月 28 日
201 号、202 号投稿募集：<http://jair.or.jp/committee/henshu/3183.html>
 - ・203 号「核と国際政治」（編集：植木（川勝）千可子会員）

上記 2 参照

会員の皆様の積極的なご応募をお願いします。

4. 独立論文は随時応募を受け付けています。こちらもぜひ奮ってご応募ください。執筆要領等の詳細は学会 Web ページ「論文投稿等関係 (http://jair.or.jp/documents/rules_for_papers.html)」に掲載されている『国際政治』掲載原稿執筆要領」をご覧ください。応募・問い合わせ先は、編集委員会副主任:磯崎典世までお願いします。
5. 『国際政治』は特集論文、独立論文とも査読プロセスを経ています。執筆から掲載までに一定の修正が求められることが多く、時間とエネルギーを要するプロセスですが、論文の質の向上には確実に貢献していると考えています。会員各位にはなお一層積極的な投稿および再投稿をお願いします。また、編集委員会より査読をお願いした際には、多くの会員に快くお引き受け頂いており、心より感謝しております。引き続きお力添えを賜りますよう、お願いします。
6. J-stage での『国際政治』電子版では、刊行後 2 年以内の号の論文について、購読者番号とパスワードを用いた会員限定の閲覧を行っています。2016 年 9 月現在で、182 号 (2015 年 11 月刊行) までの閲覧が可能です。購読者番号とパスワードは、紙媒体ニューズレター146 号に掲載されていますが、会費納入用紙、『国際政治』等、各種の郵便物とともにお知らせしていきます。
7. 『国際政治』に掲載した論文を執筆者が転載(複製利用)する場合、ご自身の著書等に利用される際は、事前に文書で理事長に申し出ていただくことになっており、またリポジトリ等に掲載される際は、編集委員会主任に申し出ていただくことになっております (『国際政治』掲載原稿執筆要領 1-(6)・(8))。前者については、学会 Web ページに掲載している申請書をご利用ください (<http://jair.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/documents/tensaikyoka.pdf>)。双方とも連絡は編集委員会主任 山田敦までお願いいたします。

編集委員会主任 山田敦
副主任 磯崎典世
jair-edit☆jair.or.jp
(☆を@に変えてください)

広報委員会からのお知らせ

学会 HP では、会員の皆様からのシンポジウム等のお知らせや新刊紹介などを随時掲載しております。情報交換・共有の場としてご活用ください。掲載を希望される場合は、HP 右側のメインメニューの「お知らせ投稿フォーム」をご利用のうえ、ご投稿ください。統一的な記録を残していく必要があるため、お手数ですが、上記の「お知らせ投稿フォーム」への記載をお願いいたします。パスワードにつきましては、紙媒体ニューズレター146 号に掲載されていますが、今後は、会費納入用紙、『国際政治』等、各種の郵便物とともにお知らせします。

その他、ニューズレターや HP に関してお問い合わせ等がありましたら、広報委員会 (jair-pr☆jair.or.jp) にご連絡ください。(☆を@に代えてください)

広報委員会主任 山田哲也

2018 年度研究大会プログラム

※以下のプログラムは暫定版 (6月末時点) です。

共通論題

◆11月3日(土)(15:30~18:20)

「現代日本外交の30年」

司会 宮城大蔵 (上智大学)

報告 我部政明 (琉球大学)

「安全保障の観点を中心に」

- 大庭三枝（東京理科大学） 「地域主義・アジアの観点を中心に」
鈴木一人（北海道大学） 「グローバル・ガバナンスの観点を中心に」
討論 古城佳子（東京大学）
坂元一哉（大阪大学）

部会プログラム

◆11月2日（金）（13:00～15:30）

部会1 「経済と安全保障の連関」

- 司会 大矢根聡（同志社大学）
報告 金ゼンマ（明治大学）
「F T A / T P P をめぐる経済と安全保障のネクサス」
藤田泰昌（長崎大学）
「安全保障要因はF T A への態度を左右するか」
富田晃正（埼玉大学）
「アメリカ対外経済政策をめぐる外交利益と経済利益の緊張」
討論 清水一史（九州大学）
武田康裕（防衛大学校）

部会2 「キリスト教民主主義と欧州政治——歴史的な考察を踏まえての再検討——」

- 司会・討論 小川有美（立教大学）
報告 宮下雄一郎（松山大学）
「ロベール・シューマンの国際秩序観」
板橋拓巳（成蹊大学）
「ヴァルター・ハルシュタインの戦後秩序構想」
松本佐保（名古屋市立大学）
「キリスト教民主主義と第二バチカン公会議：世界教会協議会 WCC との関係を中心に」
討論 上原良子（フェリス女学院大学）

部会3 「アジアから見た国際連盟——設立100周年に向けた国際連盟史の再検討——」

- 司会 篠原初枝（早稲田大学）
報告 詫摩佳代（首都大学東京）
「国際連盟シンガポール伝染病情報局とアジアの地域秩序」
高橋力也（日本大学）
「国際連盟における国際法典編纂事業と日本」
齋川貴嗣（高崎経済大学）
「国際連盟の知的協力事業と日本・中国」
討論 後藤春美（東京大学）
等松春夫（防衛大学校）

部会4 「グローバル・ガバナンス論の最前線」

- 司会 福田耕治（早稲田大学）
報告 土屋大洋（慶應義塾大学）
「サイバースペースのグローバル・ガバナンス」
西谷真規子（神戸大学）
「腐敗防止をめぐるグローバル・ガバナンス」
渡邊智明（九州大学）
「気候変動めぐるグローバル・ガバナンス」
討論 山田高敬（名古屋大学）
太田 宏（早稲田大学）

◆11月3日（土）（9:30～12:00）

部会5 日韓合同部会 “Democracy and Diplomacy in North-East Asia: from National and Global Perspective” 【英語で実施】

Chair: Takuya Sasaki (President, JAIR/ Rikkyo University)

Speakers: Dongmin Lee (Dankook University)

"Political leadership and Korean Foreign Policy"

Another Speaker from KAIS to be announced

Hidekazu Wakatsuki (Hokkai-Gakuen University)

Title to be announced.

Discussants: Chieko Otsuru-Kitagawa (Kansai University)

Ryo Oshiba (Aoyama Gakuin University)

部会 6 「第一次世界大戦とその遺産——第一次大戦終結 100 周年——」

司会・討論 木畑洋一 (東京大学名誉教授)

報告 大久保明 (日本大学)

「第一次世界大戦後イギリスのヨーロッパ安全保障政策」

麻田雅文 (岩手大学)

「ソ連承認をめぐる国際政治 1920～30 年代」

森靖夫 (同志社大学)

「英米から見た日本の総力戦体制の形成」

討論 中谷直司 (三重大学)

部会 7 「地政学の台頭?——国際政治学の視点から——」

司会 高橋良輔 (青山学院大学)

報告 渡邊公太 (帝京大学)

「地理から見た国家の本質——N.スパイクマンにおける拡張と防衛の論理」

柴田陽一 (摂南大学)

「帝国日本における地政学の受容と展開——科学性と実践性のはざままで」

春名展生 (東京外国語大学)

「国際政治学の成立と地政学の受容——小野塚喜平次とルドルフ・チェレーンの邂逅を起点として」

討論 土佐弘之 (神戸大学)

福田宏 (成城大学)

部会 8 「国際政治学における『イズム』思考の再検討」(ラウンドテーブル)

司会 湯川拓 (大阪大学)

報告 土山實男 (青山学院大学)

宮岡勲 (慶應義塾大学)

光辻克馬 (東京大学)

籠谷公司 (大阪経済大学)

部会 9 「保護する実践と統治の現実——コミュニティ・都市・自治——」

司会 酒井啓子 (千葉大学)

報告 西山隆行 (成蹊大学)

「アメリカの聖域都市と不法移民問題」

明石純一 (筑波大学)

「難民の保護とその実質化の過程——日本の第三国定住難民の受入れを事例として」

堀井里子 (国際教養大学)

「EU 国境管理ガバナンスにおける NGO の役割——地中海での捜索救難活動を事例として」

討論 上野友也 (岐阜大学)

中山裕美 (東京外国語大学)

◆11月4日(日)(14:00～16:30)

部会 10 「方法の進展とその達成——通説の修正という観点から」

司会 石黒 馨 (神戸大学)

報告 多湖 淳 (早稲田大学)

「国連決議の対世論説得効果の研究——実験が示す既存研究の問題点」

- 阪本拓人（東京大学）
「脅威認識の形成と変容——自然言語処理による可測化と理論検証」
大石晃史（国立情報学研究所）
「紛争下の離合集散に構造はあるか——ネットワーク分析」
討論 山本吉宣（新潟県立大学）
松村尚子（神戸大学）

部会 11 「朝鮮半島安全保障構造の起源と展開」

- 司会・討論 平岩俊司（南山大学）
報告 朴正鎮（津田塾大学）
「1970年代北朝鮮の安全保障認識」
伊藤弘太郎（キヤノングローバル戦略研究所）
「韓国自主国防の起源と展開」
劉仙姫（帝塚山大学）
「1970年代のベトナム戦争の展開と韓国」
討論 阪田恭代（神田外語大学）

部会 12 「中国の Sharp Power と東アジアの市民社会」

- 司会 三宅康之（関西学院大学）
報告 鈴木隆（愛知県立大学）
「習近平時代における中国共産党の統一戦線政策」
倉田徹（立教大学）
「Sharp Power から Hard Power へ？：香港に見る Sharp Power の効果と限界」
渡辺剛（杏林大学）
「中国シャープパワー攻勢下における台湾国民意識の形成と動揺」
討論 佐橋亮（神奈川大学）
阿古智子（東京大学）

部会 13 「『分断』を再考する」（市民講座を兼ねる）

- 司会 竹中千春（立教大学）
報告 塩原良和（慶應義塾大学）
「分断する社会の諸相——日本とオーストラリアを中心に」
錦田愛子（東京外国語大学）
「離散により乗り越える分断——パレスチナ人の再難民化と国民国家」
土谷岳史（高崎経済大学）
「EUにおけるロマ——『包摂』と『分断』の境界」
討論 正躰朝香（京都産業大学）
杉木明子（慶應義塾大学）

部会 14 「主権と人権の相克」（自由論題部会）

- 司会・討論 篠田英朗（東京外国語大学）
報告 秋山 肇（日本学術振興会）
「無国籍の予防と国家秩序——英国学派を手がかりに」
澤田眞治（防衛大学校）
「ブラジル外交における『保護する間の責任』」
宮下大夢（早稲田大学）
「ロヒンギャ問題への対応に関する比較分析——外部アクターによる政治的圧力と建設的
関与に着目して」
討論 佐藤誠（立命館大学）

分科会プログラム

- ◆11月2日（金）
分科会セッション A（15:45～17:15）

A-1 日本外交史 I 責任者 片山 慶隆 (関西外国語大学)
テーマ ラウンドテーブル：外交記録公開の進化と戦後日本外交史研究
モデレーター 高橋 和宏 (防衛大学校)
パネリスト 川島 真 (東京大学)
白鳥 潤一郎 (放送大学)
福嶋 香代子 (外務省外交史料館長)
宮野 理子 (外務省外交記録・情報公開室長)

A-2 中東 I 責任者 吉川 卓郎 (立命館アジア太平洋大学)
テーマ 中東における君主制同盟——拡大 GCC 構想をめぐる諸国の対応
司会 松尾 昌樹 (宇都宮大学)
報告 村上 拓哉 (中東調査会)
「体制転換の脅威と同盟——「アラブの春」とカタール断交危機における GCC 諸国の対応」
白谷 望 (愛知県立大学)
「モロッコの外交政策における対 GCC 関係の位置づけ」
渡邊 駿 (京都大学)
「ヨルダンからみた拡大 GCC 構想—アラブの春後の中東秩序における君主制同盟」
討論 君塚 直隆 (関東学院大学)

A-3 アフリカ 責任者 杉木 明子 (慶應義塾大学)
テーマ アフリカにおける「ポスト・コンフリクト」と平和構築をめぐる様々な課題
司会 杉木 明子 (慶應義塾大学)
報告 藤井 広重 (宇都宮大学)
「アフリカ連合における地域の刑事裁判所設置の試みと国際刑事裁判所」
片山 夏紀 (東京大学/日本学術振興会)
「移行期正義の「移行期」はいつ終わるのか：ジェノサイド後のルワンダを事例に」
討論 望月 康恵 (関西学院大学)

分科会セッション B (17:30~19:30)

B-1 東アジア国際政治史 / 東アジア I 責任者 阿南 友亮 (東北大学) / 飯田 将史 (防衛研究所)
テーマ 東アジア外交・安全保障の諸問題
司会 飯田 将史 (防衛研究所)
報告 沈 家銘 (京都大学)
「ダビデとゴリアテ——グローバル化時代における中台関係安定化の中範囲理論の試み」
長谷川 将規 (湘南工科大学)
「中国台頭への安全保障装置としての TPP」
李 ウォンギョン (上智大学)
「日韓間のパブリック・ディプロマシーの現状と課題：両国政府のサイバー外交を中心として」
五十嵐 隆幸 (防衛大学校)
1960年代の「大陸反攻」——「攻勢戦略」から「攻守一体戦略」への転換
討論 阿南 友亮 (東北大学)

B-2 アメリカ政治外交 I 責任者 小野沢 透 (京都大学)
テーマ 「超大国」アメリカ再考
司会 倉科 一希 (広島市立大学)
報告 草野 大希 (埼玉大学)
「ウィルソンのリベラル介入主義の再考—介入の構造的問題に直面していたウィルソン」
田中 聡一郎 (一橋大学)
「尻尾が犬を振り回す—「白色革命」をめぐるイラン—アメリカ外交 1961~1964年」
討論 三牧 聖子 (高崎経済大学)
小野沢 透 (京都大学)

B-3 国際政治経済 責任者 岡本 次郎 (下関市立大学)

テーマ 自由論題
 司会 岡本 次郎（下関市立大学）
 報告 田巻 宏将（前橋清陵高等学校）
 「日本の東アジア金融協力：制度間のネットワークの視点から」
 尹 海圓（東京大学）
 「日韓の産業競争力に影響する政治的要因の比較分析：国際分業化時代のサプライチェーン再構築に対する政治的要因を中心に」
 徐 博晨（東京大学）
 「国際経済を巡る規範の成立：アメリカと開発援助の「無償化」」
 討論 和田 洋典（青山学院大学）
 武内 進一（東京外国語大学／アジア経済研究所）

B-4 トランスナショナル I 責任者 岡部 みどり（上智大学）
 テーマ <書評会>『「国際政治学」は終わったのか（仮題）』（ナカニシヤ出版、2018年10月刊行予定）から、日本の国際政治学の過去・現在・将来をグローバルな視野から考える
 司会 山本 吉宣（新潟県立大学）
 報告 葛谷 彩（明治学院大学）
 「『IR』から『歴史』への回帰—日本の国際政治学からの試み」
 芝崎 厚士（駒澤大学）
 「終わりは、はじまり—オルター国際政治学の構想と日本の国際政治学」
 討論 酒井 哲哉（東京大学）
 中西 寛（京都大学）

B-5 平和研究 I 責任者 上野 友也（岐阜大学）
 テーマ 平和のアポリア
 司会 松田哲（京都女子大学）
 報告 杉浦功一（和洋女子大学）
 「平和とデモクラシーの間のジレンマの検証—「神話」は崩壊したのか？」
 市川ひろみ（京都女子大学）
 「兵役拒否をめぐるアポリア」
 討論 定形衛（名古屋大学）
 高橋良輔（青山学院大学）

B-6 環境 責任者 沖村 理史（島根県立大学）
 テーマ 環境政策の諸課題
 司会 沖村 理史（島根県立大学）
 報告 中川 洋一（立命館大学）
 「ドイツのエネルギー転換と気候変動保全政策の現状と課題（仮）」
 大久保 彩子（東海大学）
 「Do norms really explain the polarization of the International Whaling Commission? -Alternative hypotheses」
 討論 （未定）

B-7 若手研究者・院生研究会 責任者 石井 雅浩（一橋大学）
 テーマ Rethinking International Institutions
 司会 石井 雅浩（一橋大学）
 報告 大道寺 隆也（早稲田大学）
 Inter-organizational Relations and European Institutions: Human Rights Protection in Criminal Cooperation
 Nicholas Peeters（早稲田大学）
 A Club and Its Gatekeepers: The Establishment of the OECD and Japanese Membership
 討論 小川 浩之（東京大学）
 川嶋 周一（明治大学）

◆11月3日（土）
 分科会セッションC（13:30～15:10）

- C-1 アメリカ政治外交Ⅱ／東南アジア** 責任者 小野沢 透（京都大学）／五十嵐 誠一（千葉大学）
- テーマ 冷戦の舞台としての東南アジア
- 司会 五十嵐 誠一（千葉大学）
- 報告 鳥潟 優子（同志社女子大学）
「アメリカの東南アジア介入の起源—インドネシア独立戦争と米蘭の蹉跌」
篠崎 正郎（航空自衛隊幹部学校）
「東南アジア安全保障体制の再編—イギリス＝マレーシア防衛協定から5ヶ国防衛取極へ、1968-71年—」
- 討論 寺地 功次（共立女子大学）
都丸 潤子（早稲田大学）
- C-2 ロシア東欧** 責任者 溝口 修平（中京大学）
- テーマ 旧ソ連地域における国内政治と国際政治の相克
- 司会 溝口 修平（中京大学）
- 報告 油本 真理（北海道大学）
「汚職防止の国際規範とロシア—公職者の資産公開制度を事例として—」
吉村 貴之（早稲田大学）
「現代アルメニア系在外同胞と本国政治」
- 討論 富樫 耕介（東海大学）
中井 遼（北九州市立大学）
- C-3 中東Ⅱ** 責任者 吉川 卓郎（立命館アジア太平洋大学）
- テーマ 中東の共和制国家と体制基盤確立の模索
- 司会 浜中 新吾（龍谷大学）
- 報告 辻田 俊哉（大阪大学）
「安全保障におけるレジリエンス構築の模索—イスラエルのサイバーセキュリティ政策を事例として」
河村 有介（日本学術振興会）
「権威主義体制下における年金改革—エジプトを事例として」
- 討論 岩坂 将充（同志社大学）
- C-4 国際統合Ⅰ** 責任者 臼井 陽一郎（新潟国際情報大学）
- テーマ 地域主義と安全保障
- 司会 臼井 陽一郎（新潟国際情報大学）
- 報告 東野 篤子（筑波大学）
「東方パートナーシップ（EaP）の10年」
岡本 至（文京学院大学）
「アジア太平洋地域の 'Patrick Henry Moment': 地域的安全保障複合圏（RSC）理論の地域主義分析への応用」
- 討論 中村英俊（早稲田大学）
- C-5 政策決定** 責任者 本多 倫彬（キヤノングローバル戦略研究所）
- テーマ 冷戦後の対外政策における自衛隊
- 司会 本多 倫彬（キヤノングローバル戦略研究所）
- 報告 三百苺 拓志（平和・安全保障研究所）
「日米安全保障協議委員会(SCC)のプロセス: 「2プラス2」の質的变化を中心に」
尹 在彦（一橋大学）
「構成主義の観点から見た有事法制・自衛隊イラク派遣の成立過程: 拉致問題とメディア要因を踏まえて」
加藤 博章（東京福祉大学）
「湾岸危機以降の国際貢献の模索」
- 討論 (調整中)
- C-6 トランスナショナルⅡ** 責任者 岡部 みどり（上智大学）
- テーマ 難民保護と国境管理のための南欧諸国間協力—EU及び域外諸国との対話を中心に

司会 細田 晴子（日本大学）
 報告 坂井 一成（神戸大学）
 「地中海の移民難民問題をめぐるフランスの戦略」
 八十田 博人（共立女子大学）
 「イタリアにおける海上移民・難民保護：EU、国家、地元住民、NGO の相互関係」
 今井 宏平（ジェトロ・アジア経済研究所）
 「シリア難民に対するトルコと EU の協調行動」
 討論 錦田 愛子（東京外国語大学）

C-7 平和研究Ⅱ 責任者 上野 友也（岐阜大学）
 テーマ 折衷的な国家建設：自由主義と現地重視をつなぐ治安部門改革（SSR）の可能性と課題
 司会 古澤 嘉朗（広島市立大学）
 報告 藤重 博美（法政大学）
 「第二世代の治安部門改革（SSR）：「自由主義」・「現地重視」の折衷は国家建設の妙策か」
 クロス 京子（立命館大学）
 「東ティモールの治安部門改革（SSR）：国連と政府のせめぎあいから生まれた国家建設の方向性」
 小山 淑子（早稲田大学）
 「ジョージア（グルジア）の治安部門改革（SSR）：不均衡な改革履行の力学と課題」
 討論 中内 政貴（大阪大学）
 キハラハント 愛（東京大学）

C-8 ジェンダーⅠ 責任者 和田 賢治（武蔵野学院大学）
 テーマ 紛争影響下のジェンダーに基づく暴力（Gender-based violence: GBV）
 司会 川口 智恵（JICA 研究所）
 報告 飛内 悠子（盛岡大学）
 「支援とジェンダー、GBV への認識との関わり——南スーダン難民の事例から」
 福井 美穂（難民を助ける会／東京大学）
 「被害者支援における援助の役割——南スーダン難民調査を踏まえて」
 討論 中西 久枝（同志社大学）

◆11月4日（日）
 分科会セッション D（9:30～11:00）

D-1 日本外交史Ⅱ 責任者 片山 慶隆（関西外国語大学）
 テーマ 戦後日本外交と東アジア国際政治
 司会 片山 慶隆（関西外国語大学）
 報告 西村 真彦（京都大学）
 「1950年代の台湾海峡危機と日米安保体制」
 大竹 徳典
 「田中政権による日中国交正常化の交渉過程の再検討」
 討論 井上 正也（成蹊大学）
 神田 豊隆（新潟大学）

D-2 欧州国際政治史・欧州研究Ⅰ 責任者 齋藤 嘉臣（京都大学）
 テーマ 北欧外交と冷戦
 司会 齋藤 嘉臣（京都大学）
 報告 竹澤 由記子（大阪女学院大学）
 「ノルウェーの「基地政策」とその戦略的・政治的意義についての考察—1950年代から60年代までを中心に」
 鈴木 悠史（慶應義塾大学）
 「1950年代から60年代前半におけるスウェーデン冷戦戦略の中での国連政策」
 討論 五月女 律子（神戸市外国語大学）
 清水 謙（立教大学）

D-3 東アジアⅡ 責任者 飯田 将史 (防衛研究所)
 テーマ 東アジア諸国のグローバルな秩序形成戦略
 司会 飯田 将史 (防衛研究所)
 報告 小川 裕子 (東海大学)
 「G77+中国のグローバル秩序形成戦略——イシュー・リンケージによる公平性の実現」
 勝間田 弘 (東北大学)・永田 伸吾 (金沢大学)
 「ASEANによる大国の制御——東アジア秩序形成を主導するマイナーパワーの外交戦略」
 堀内 賢志 (静岡県立大学)
 「ロシアの『東方シフト』と『多極化』戦略」
 討論 湯浅 剛 (広島市立大学)
 野口 和彦 (群馬県立女子大学)

D-4 理論と方法Ⅰ 責任者 多湖 淳 (早稲田大学)
 テーマ テキスト分析が切り開く国際関係研究
 司会 多湖 淳 (早稲田大学)
 報告 渡辺 耕平 (早稲田大学)
 「Quantedaによる国際政治事象のテキスト分析」
 河合 将志 (国立情報学研究所)
 「大統領演説に見るウィルソン主義-計量テキスト分析による再考-」
 討論 多湖 淳 (早稲田大学)

D-5 国連研究 責任者 本多 美樹 (法政大学)
 テーマ 変容する国際秩序と加盟国の国連観
 司会 本多 美樹 (法政大学)
 報告 半澤 朝彦 (明治学院大学)
 「イギリスの国際秩序観と国連観」
 上杉 勇司 (早稲田大学)
 「日本の国連平和活動観」
 討論 青井 千由紀 (東京大学)

D-6 平和研究Ⅲ 責任者 上野 友也 (岐阜大学)
 テーマ 自由論題
 司会 上野 友也 (岐阜大学)
 報告 小阪 真也 (立命館大学)
 「国際刑事法廷における「積極的補完性」の実行と国内の法の支配の確立：紛争後ボスニアとセルビアにおける旧ユーゴスラヴィア国際刑事法廷 (ICTY) のアウトリーチおよび能力構築機能の意義」
 松寄 英也 (北海道大学／日本学術振興会)
 「黒海における民族少数派と領域制度：ウクライナとモルドヴァを事例に」
 討論 片柳 真理 (広島大学)
 中溝 和弥 (京都大学)

分科会セッション D・E (9:30~12:45)

D・E アメリカ政治外交Ⅲ／ラテンアメリカ 責任者 小野沢 透 (京都大学)／
 ロメロ イサミ (帯広畜産大学)
 テーマ 米州機構体制の70周年
 司会 ロメロ イサミ (帯広畜産大学)
 報告 高橋 亮太 (慶應義塾大学)
 「米州機構とブラジル」
 中嶋 啓雄 (大阪大学)
 「「西半球」概念と米州機構——モンロー・ドクトリンとの関連において」
 江原 裕美 (帝京大学)
 「「進歩のための同盟」の機構と活動—開発と教育の視点から」
 小池 康弘 (愛知県立大学)

「キューバはなぜ OAS 復帰を拒むのか - 「革命外交」からみた米州関係」
討論 上村 直樹 (南山大学)
上 英明 (神奈川大学)

分科会セッションE (11:15~12:45)

E-1 日本外交史Ⅲ 責任者 片山 慶隆 (関西外国語大学)

テーマ 戦間期日本外交の再検討
司会 片山 慶隆 (関西外国語大学)
報告 種稻 秀司 (國學院大學)

「外交官幣原喜重郎の理念と外交指導」
金子 貴純 (大東文化大学)
「日本外務省の対中国「危機管理外交」の展開過程—1936年を中心に」
討論 伊香 俊哉 (都留文科大学)
西田 敏宏 (椋山女学園大学)

E-2 欧州国際政治史・欧州研究Ⅱ 責任者 齋藤 嘉臣 (京都大学)

テーマ 戦間期国際秩序の再検討
司会 (未定)
報告 大原 俊一郎 (亜細亜大学)
「ヨーロッパ諸国家体系からグローバル国際システムへ」

細川 真由 (日本学術振興会)
「パリ講和会議とフランス外交—ヨーロッパ国際秩序の再編をめぐって」
討論 渡邊 啓貴 (東京外国語大学)

E-3 理論と方法Ⅱ 責任者 多湖 淳 (早稲田大学)

テーマ 安全保障研究における理論と方法
司会 多湖 淳 (早稲田大学)
報告 芝井 清久 (統計数理研究所)

「核不拡散政策における IAEA 査察の抑止効果とその限界点—ベイジアン・ゲーム分析による査察実行の最適化」
小山 達也 (東京大学)
「Disaggregating Peace Failure: The Two Distinct Paths Toward Armed Conflict Recurrence」
増永 真 (秀明大学/明治学院大学)
「同盟国の政策変更による「バランス」の機能変化とその受益国の対応—北朝鮮と台湾の対外行動を事例として—」
伊藤 隆太 (慶應義塾大学)
「なぜナショナリズムは戦争を起こすのか—リアリスト理論への内集団バイアスの導入」
討論 伊藤 岳 (人間文化研究機構/富山大学)

E-4 国際統合Ⅱ 責任者 白井 陽一郎 (新潟国際情報大学)

テーマ EU 政策過程における非国家アクターの役割
司会 白井 陽一郎 (新潟国際情報大学)
報告 吉沢 晃 (同志社大学)

「EU 競争政策の正統性—消費者の視点から」
河越 真帆 (神田外語大学)
「航空に関する環境規制と民間団体：EU および ICAO レベルでの考察」
討論 中野 聡 (豊橋創造大学)

E-5 安全保障 責任者 千々和 泰明 (防衛研究所)

テーマ 現代安全保障課題の諸相—PKO・不拡散・国際機構
司会 千々和 泰明 (防衛研究所)
報告 庄司 貴由 (日本大学)
「細川政権期の PKO 政策—国連エルサルバドル監視団 (ONUSAL) 派遣と日本」
日高 薫 (大阪大学)

- 「生物化学兵器の拡散をめぐる『貧者の核兵器』論の再検討」
 秦野 貴光（筑波大学）
 『抗争的多国間主義』時代における国際規範と国際法—ロシアの地域・国際安全保障政策を中心に」
- 討論 千々和 泰明（防衛研究所）
 戸崎 洋史（日本国際問題研究所）
- E-6 国際交流** 責任者 馬場 孝（静岡文化芸術大学）
 テーマ 日本における国際協力思想の規範化と制度化：戦前・戦後の断続と連続（仮）
 司会 馬場 孝（静岡文化芸術大学）
 報告 湯浅 拓也（青山学院大学）
 「前田多門と近代日本の国際協力論：新渡戸稲造のキリスト教人格主義における「ソシアリチー」に注目して」
 秋月 三左子（早稲田大学）
 「日本における開発援助制度の形成過程：1970年代以降を中心に」（仮）
- 討論 牧田 東一（桜美林大学）
- E-7 ジェンダーII** 責任者 和田 賢治（武蔵野学院大学）
 テーマ 戦後を生きる人々とジェンダー
 司会 和田 賢治（武蔵野学院大学）
 報告 北村 陽子（名古屋大学）
 「寡婦たちの戦争——第一次世界大戦期ドイツにおける戦争犠牲者援護」
 望戸 愛果（日本学術振興会）
 「第一次世界大戦後アメリカにおける「戦争体験」のジェンダー化された序列」
- 討論 竹中 千春（立教大学）

2017年度第2回国際学術交流助成報告書

ISA 年次大会（米国サンフランシスコ）参加報告

政所大輔（神戸大学）

このたび、日本国際政治学会より2017年度第2回国際学術交流助成を頂き、2018年4月4日から7日まで米国サンフランシスコで開催された

International Studies Association

(ISA) の第59回年次大会に参加し、論文報告を行った。まずは、ご多用のなか私の申請について審議して下さった国際交流委員会主任の都丸潤子・早稲田大学教授をはじめ、委員の先生方に深く感謝申し上げたい。現在進めている研究を国際的に発信し進展させていくための、大変有り難い機会を得ることができたと感じている。

私の研究報告は大会初日の朝一番のパネル (Peace and Protection: Norms, Power, and Outcomes in Humanitarian Intervention) であり、私は時差ボケが残るなか、十分な練習と準備を行って報告に臨んだ。私が発表した論文は、“Compromise is Important for Norm Diffusion: Multilateral Negotiations and the Responsibility to Protect” という単著の論文で、妥協



の産物として成立した多国間合意がその後の規範の伝播にどのような影響を及ぼすのかを、保護する責任を事例に分析したものである。コンストラクティビズム研究において多国間合意は従来、規範が普及した結果として交渉を通じて成立するものであると理解されてきた。これに対して本論文では、多国間合意は規範の普及過程の結果というよりはむしろその過程における一つの局面であり、当該合意が様々な主体によって事後的に参照されることで、合意に含まれた規範の伝播が促される場合があることを論じた。

発表論文に対しては、まず討論者の Marc Doucet (Saint Mary's University) 氏から、保護する責任について国連総会での合意形成を主導したカナダ政府のイデオロギー的な側面に注意する必要性を指摘された。また座長の Tamara Trowsell (Universidad San Francisco de Quito) 氏からは、今回の年次大会のテーマが“Power of Rules and Rule of Power”であることから、多国間の合意形成や形成された合意の事後的な参照においてパワーがどのようにかわるのか、という質問を受けた。今後、本論文を修正していく際に参考にしたいと考えている。

これまで何度かISAに参加しているが、今回参加して改めて感じたのは、非常に刺激的で魅力的な研究報告や機会が多いということである。それは、北米にとどまらず世界中から多様な研究者が集まり議

論を行うからだけでなく、ISA 自身も常に新たな試みを打ち出し参加者を引き付けようとしているからでもあるだろう。今後も ISA をはじめとする国際学会に参加し、単に自分の研究を報告してフィードバックを得るだけでなく、参加者を引き付け面白いと思ってもらえるような報告ができるよう努力していきたい。

MPSA 参加報告書

長辻貴之（西アフリカ研究所
（在ダカール）客員研究員）

2018年4月にシカゴで開催された Midwest Political Science Association (MPSA) にて2つの研究発表を行った。本報告書では、それぞれの研究発表内容と討論者からえたコメントを報告したい。



MPSAの3日目の Politics and Development in Africa パネルにて、早稲田大学所属の門屋寿氏と執筆した“Seeing is Believing: Recipient’s Aid Strategies in Senegal”を発表した。開発援助文献では、援助ドナーの配分動機に焦点が当てられてきたが、本研究では援助受け取り国側の政治的指導者の援助配分の動機を分析した。まず政治的指導者が選挙で勝つために、選挙前の時期に前回選挙で指導者の得た票が少ない地域に多くの援助を分配する動機があることを理論的に説明した。セネガルの第一行政区画レベルのデータを使用し統計分析を行い、観察可能な含意を証明する結果を示した。討論者の Gretchen Casper 氏（ペンシルベニア州立大学）から、政治的指導者が持っている影響力、そして内生性の問題を考える重要性についてコメントをえた。

4日目には Repression and Terrorism パネルにて“Unpredictable Social Movements and State Repression: Analysis of Student Movements and Student Participants in Senegal”を発表した。近年の政治的抑圧文献では選挙タイミングと選挙結果という時間と地理的要因に焦点が当てられていることに対し、本研究ではこれらの要因では説明できない社会運動が多くあることを示し、新しいアクターが社会運動を素早く動員する場合、政府は時間や場所に関係なく抑圧することを説明した。次に、セネガルのイベント・レベルのデータを使用した統計分析結果を示した。討論者の Jacqueline Hardt 氏（ニューヨーク州立大学バッファロー校）からは、政治的指導者が社会運動の発生を許す理由、そして運動の拡散を考慮する必要性について指摘をえた。

今回の研究発表では多くの貴重なコメントそしてアドバイスをえた。これらのコメント等をもとに論文を修正し、英語ジャーナルへの投稿と出版を目指したい。

ISA 年次大会（米国サンフランシスコ）参加報告

佐藤洋一郎（立命館アジア太平洋大学）

2018年4月4-7日、サンフランシスコで開催された米国国際研究学会（International Studies Association）に参加してきた。この学会には記憶が正しければ2000年より参加しているが、年々の会員数の増加に伴い、欧州、ラテンアメリカ、アジアからの参加者が目立つようになり、もはや「米国の」国際研究学会という雰囲気ではなく、グローバルな学会の様相を呈してきた。会員数の増加と共にパネルや論文発表の採択率が下がり、私もかつての「10割打者」から、年々打率が低下してきている。一部の米国人研究者たちの中には「保護主義」的な動きも見られる。年次総会におけるパネル枠や会費収入の分配に関わる、新たなセクションの設置に対するあからさまな反対は、そうした動きが表面化した例といえるだろう。

とはいっても、著名な米国人研究者の出ているパネルへ部屋に入りきれないほどの会員が押しかける様子は相変わらずで、ジョセフ・ナイやジョン・ミアシュハイマーの競演となったラウンドテーブルなどは、ちょっとしたロックコンサートのようにであった。

私がこの学会に参加し始めた頃は、アメリカの大学院に学ぶ元気のいい日本人大学院生に出会ったものだが、最近では早くに日本へ戻った同年代の顔なじみばかりだ。全体的に日本人研究者の国際プレゼンスが低下傾向にあることは憂慮すべきことである。そうしたなかで、「生涯の若者」でK大学での私の恩師でもあるS先生が本学会に初参加されたことは特記に値するだろう。先生のように海外から頻りに招請されている方にとっては、履歴に追加するほどの大それたことでは無いにも関わらず、わざわざ足を運んで頂けたことは、他の日本人研究者にとって大きな励みとなった。

一方で、中国人研究者はかつての英語があまり上手でなかった世代と較べ、流暢な英語で発表をこなす若手の数が伸びている。「新国際秩序」を唱える中国政府の国策に共鳴するかのごとく「中国版国際関係論（Chinese IR）」を唱え、歴史的な「朝貢システム」を持ち出して「国家主権」をベースとした欧米のIRに挑戦する動きもあるが、一方で米国の自由な研究環境で自由な視野をはぐくむ中国人研究者が大勢いるのも事実で、開かれた研究環境の中にはおのずからバランスが生まれるものだと思えて感じた次第である。

私の発表した「南シナ海問題」に関するパネルにも多くの研究者が聴きにきてくれた。この学会でこういう問題を扱うパネルには、しばしば米国政府の人も出没するのだが、最近では中国政府の人とおぼしき人も目にするようになった。中国の「核心的利益」に関わる問題をテーマとした欧米で開かれるフォーラムなどで、中国人留学生の参加や言動に現地の領事館員が目を光らせているのは周知のことだが、

学術交流への政治介入が逆効果であることに、中国政府もそろそろ気づくのではなからうか？

最後になるが、今回の学会参加への一部助成を、英文ジャーナルの編集委員として7年間お付き合い

させて頂いた日本国際政治学会から受けた。あらためてここに感謝の意を表したい。

■編集後記

現体制でお届けするニューズレターは、本号が最後です。これまで原稿をお寄せくださった多くの皆さまに、改めてお礼申し上げます。次号からも引き続き、会員の皆さまが学会の情報源として本誌をご活用くださるようお願いしております。頼りない主任を最後まで支え続けてくださったKM&SK両氏には、感謝の言葉が見つからないほどです。2年間、計8号の刊行をご一緒できて幸せでした。(AY)

2期4年間にわたりNL編集に携わりました。NLは現会員への広報というだけでなく、学会HPの「アーカイブズ」コーナーにNLバックナンバーが掲載されているように、学会活動の記録という意味もあります。4半期ごとの刊行は思いのほか慌ただしかったですが、なんとか責任を全うできてほっとしています。主任の山田先生、レイアウトをご担当くださった小林さん、どうもありがとうございました。(KM)

NL編集に携わって、1年半。あっという間でしたが、山田先生、牧野先生どうもありがとうございました。会員の皆様には引き続きどうぞよろしく願いいたします。(SK)

日本国際政治学会ニューズレター No.156
(2018年7月31日発行)

発行人 佐々木 卓也
編集人 山田 敦・牧野 久美子・小林 哲

〒186-8601 東京都国立市中 2-1
一橋大学第三研究館内
日本国際政治学会 一橋事務所気付
山田敦 jair-pr☆jair.or.jp